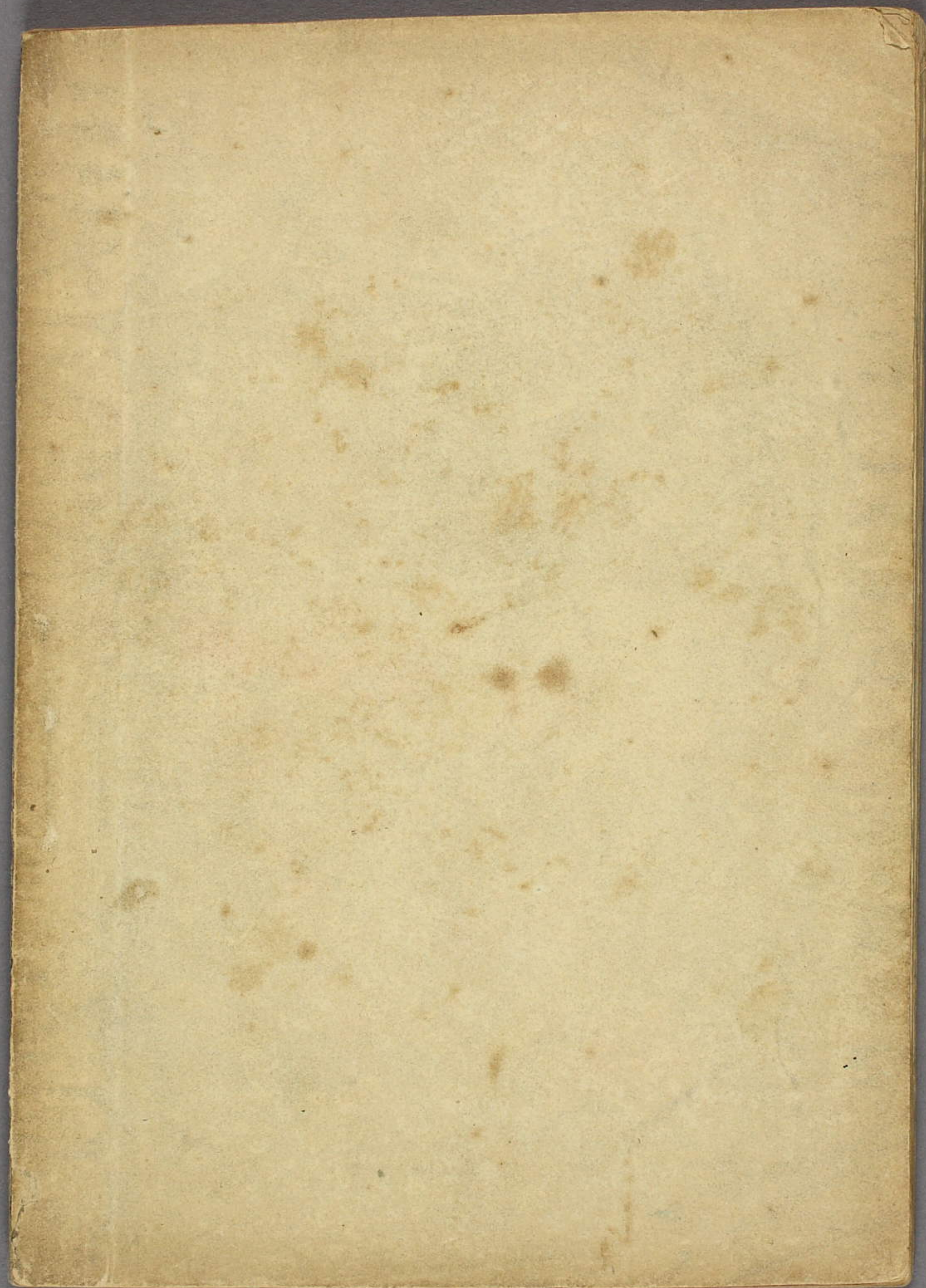


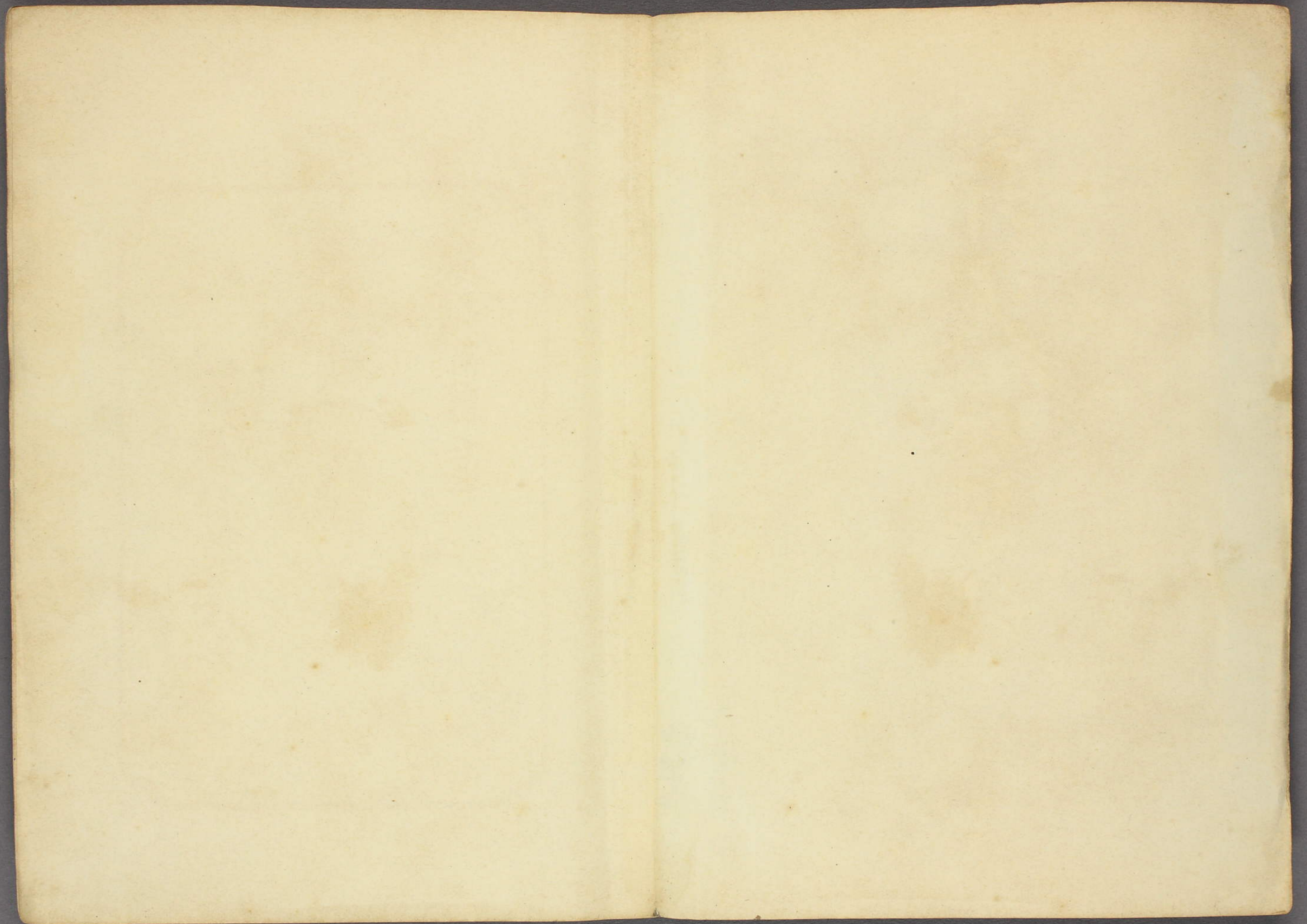


野人
橋村詩







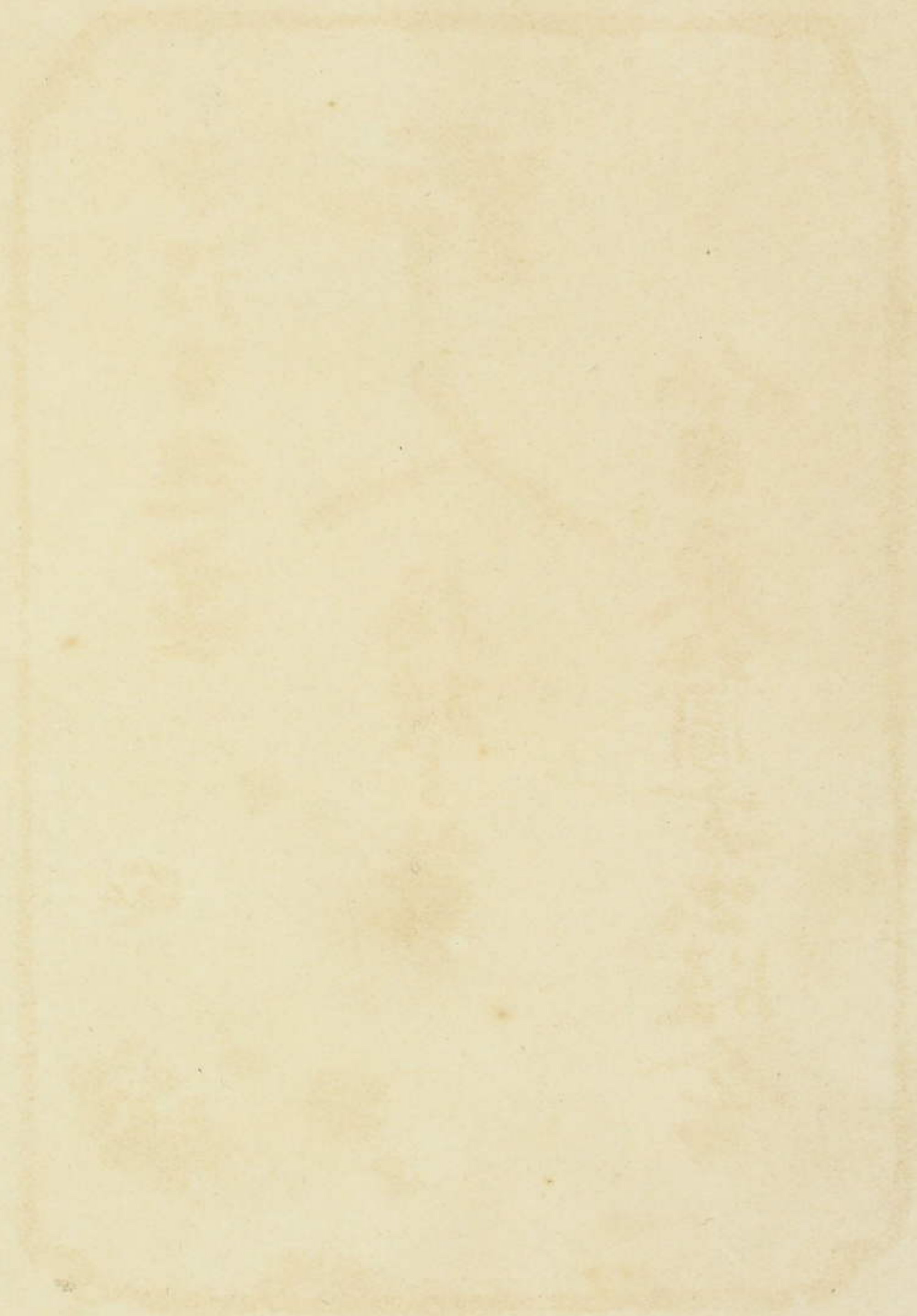


平福百穂畫

野人

橋村詩

仙名東北圖書出版會



野人序

朝霧白き牧場にうたふ草刈歌、夕月ほの暗き
棧路に聞ゆる馬子の唄、あるは海士山樵のう
たふ調の、うの調こゝ高からざれ、いづれ人生
の苦を離れ、自然の美に打たるゝものにかあ
らざるべき、山巔の雲、孤村の雨、ひこり遊子が
寂しき羈情をなくさめ得るに至りては豈神
韻の妙を傳ふるものにあらずや、野人橘村の
詩は寧ろこれを希ふものなり。

辛丑清夏

羽澤の寓葡萄樹乃蔭にて

橘村 志るす

目次

夕の別れ夜乃迎へ……………一

森の木小屋……………一〇

海に珠あり……………一三

白露光……………一五

其一、異象あり……………一五

其二、失望す……………二〇

其三、潜光を認む……………二四

風……………二八

野の人……………三一

羊のぬし……………三五

野葡萄……………四〇

仙姑……………四五

野	火	四九
野	の 兒	五二
歌女	の 歎き	五六
松島	歌	一
前	五九
後	六四
小	管 笠	六九
太陽の詩 一の巻		
序	金鞍白馬	七一
黄道十二宮 第壹節		
一	地球 流星 月	七六
二	火 星	八九
三	木 星	九二

四	土 星	九九
五	天王星	一〇三
六	海王星	一〇五
七	群 星	一〇七
八	金 星	一一四
九	水 星	一一六
十	十二宮	一二〇
十緒の琴 第貳節		
十一	太陽の宮のほとりにて	一二六
繪	畫 三葉	平福百穂氏



太陽の詩は完結せるものにあらず
 本篇は其十が一のみ
 續編は之を野人の第二集第三集に
 漸次掲げんとす

著者

清

水

孝

敦

東京豊多摩郡澁谷村
 羽澤文庫内

野

入

夕の別れ夜の迎へ

清水橋村着

壯^{まさ}嚴^{そか}なりし夏の日の
 白^ひき光^{ひかり}も時^{とき}たちて
 紫^し金^{こん}の彩^{いろ}の力^{ちから}あ
 白^ひ日^るの終^{はつり}を世^よに示^しす
 高^{たか}き聖^{ひじり}人^りのかくれ逝^ゆき



天國にかへる影としも
夕立つ、雲に眺めつゝ
一人緑の野にうれふ

自然のたくみ大機の
空に断たれし叢雲や
うつりゆくかげ大いなる
夏の奇峰の立すまひ
落日、履の下に踏み
今舞ひ昇るうのさまは
腕打ふり阿羅漢の
高くも笑ふ姿かな

またと燈火にくづをれて

人の終を泣まどふ
髪は亂るゝ未通女の
花の姿の白雲や
金鷄は北の空に飛び
旗は南に流れつゝ
影變りゆく夕暮の
天部の眺め慕はしき

古へ茂る夷草や
路なき山にわけ入りて
利劔打ふり日の皇子の
相模野わたり戦ひし

さまと見てころ、膝まづき
光をろがむ地心より
立ちし奇峰の頂に
あゝ白光よ長くかゝりたれ

終の床よ引ねほふ
幕よ帳よ松原の
金鴉飛びかふ影黒み
夕の聲の野をわたり
静かよせまる草の香や
深き韻の胸にしみ
心は消ゆれ幻に
靈は融けゆけ人の世か

耀さかへる夏の日の
名残のかげを紅よ
もらす松原西の野や
眞葛花咲く薄原
東に闢く杉林
ましろき空の紫の
煙のうちに生れいで
三五乃月すまどかなる
樂しき園に夜を招ぐ
風の音ない自ら
東地心に立つたりし

虹の一條白銀の
月の北方横ぎるは
奇峰の角ゆ空を射る
光に長く連かりて
山青き地の帯をせり
左千島の海に落ち
右臺島の山の雲
天心地心かけ渡す
虹の環は日の大神の
渡る碧空の橋やらむ
緑、紫、黄乃いろぬ
七つに示す天文の

榮が世にはかしこけれ

天威満ちたる夕暮の
夢より夜よさめいで、
照るべき空の月かげは
崇しや朝の霧をわけ
釋尊深山をいでたまひ
上求菩提分現はせる
光明いとど清ければ
聖衆も來り迎ふらん
白妙の衣あま津女れ
舞ひ飄す月光は

天人、人を夢やすき
玉の臺へ呼び玉ふ
夕影高み群山乃
霧にしぐる、蟬の聲
麓の寺の鐘鳴りて
遠の牧場よ牛吼ゆる

あゝ落日の弦を断ち
久遠の淵に沈みゆく
終焉の野よ汗みて
秀でし人のかしこさを
かけ渡したる白虹の
天威依稀たる景に見て

神の藝術を戀ひ慕ふ
吾は野末よ小さけれ

哀しき光うすき影
残曛とみに消え果て
冥府よりつなぐ晝と夜の
清き聲なる草の風
うする、一世醒むる世の
暫しを残す日の光輝
これ一日の別離なり
人の子よ
静かに祈れ来る夜を

喜びの色明きかげ
清光やがて渡るらむ
冥府よりつなぐ白日と夜の
清き聲なる虫の音や
一世は消えて一世また
生れもいづる夜の月
これ迎へなり一夜さの
人乃子よ
静かに祈れ来る日を

森の木小屋

馬牽き來れ山里の

若き農夫よ蔭深き
丸木柱の森の家
一人のものと働かば
汝が米倉に量満てむ

書もて來れ學舎の
若き青年よ市遠き
荒木造の森の小屋
一人のものと働みなば
汝が身聖者につらならむ

里には秋の神祭
市よは廓花の宴

心を誘ふ友あらば
脚絆せよかし世路の旅
山よものぼれ海にも入れ

何をこの世の逆境か

悲しむ勿れ黄金なきを

森の木小屋に生ひ立ちて

あゝカーフキルド神ならず

万代ついに不朽乃名

何をわが世の薄命か

歎する勿れ田乃無きを

森の木小屋に生ひ立ちて

あゝリンコルン神ならず
身は天領此民乃父

海に珠あり

海に珠あり寶あり

白水郎よ波濤に探れかし

玉探る舟の汝があたり

人守る神の靈あらむ

寶は草ま隠るなり

網もて探れ紀伊路海

風雨恐れて海人乃子よ

富を空しくする勿れ

路の難きに就かざれば
佳しき景は見えざらむ
妙義は高し榛名山
雲渡る日の旅に知れかし

海に玉あり寶あり
白水郎よ巨水よ探れかし
鹽路馴れたる汝が眼
もとより浪は見えざらむ

眞珠松帆の浦に出ず
珊瑚高師の濱になし
ひろめる寶手に得んは

天父神授乃人の能

路の難きにつかざれば
佳しき景は見えざらむ
芙蓉は高し箱根山
雲渡る日の旅に知れかし

白 露 光

一、異象あり

寂漠の日を梅の實の
暮るゝ小雨に落るごと
星は消ぬゆく夜半の空

麻阿須や雲に流しけむ
血汐の紅葉曠りて
月の光を隠したり

授け玉ひし白き日の
神代乃春乃月影は
血汐の雲に汚れつゝ
消ぬも極てたる人の世に
幸ころあらず成にけり

照る日の祇のかくれてし
天の巖門を湧きいづる
水の奔流も濁りては

波の花咲く海原の
潮は淡し、沖つ藻な
へつ藻だに香分無かりけれ

さては聳ゆる秀つ峰の
雪も塵の打交り
白く染めたる糞のあと
落葉しがらむ谷にすら
きのふ蓮の葉の笠よ
置きあましたる朝露の
やごらむ苔乃草葉だになし

射るや白矢の白き日は

秋の葡萄乃實の如く
紅深く紫に

變れる晝のさまを見て

鳥も森よやひろみけむ

囀る聲ふとだねたる

永久に蕩かぬ窟穹も

胤々となり果て

草葉さゆらぐ風もなく

ものゝ光も無に入れば

霞野川にたち立り

木の芽匂はむ春もなし

樂しき園乃後を絶ぬ

沙丹が野邊となり行けば

黒き死の幕垂れこめて

雲捲く風乃狂ふがなかに

千羽の鷗や鷺鷹の

飛びかふかげの見ゆる哉

荒立洋の水も盡き

五百重乃山も崩れては

うれの眺めに居ますある

姿崇ふとき佐保姫の

琴にひくと思はゆる

福音なに、聞くべけむ

二、失望す

朧月夜の春の空
星のやさしき煌めきは
花乃未通女の胸のうち
糸の光れ馳かよひしを
奇しや梅が香高き日は来ず
白き日影も照らさゞりき

里の鶏家の屋に
雨なき雲をつげわたる
天使の聲の散らぬまに
ひるを消し行く暮の鐘
ひゞく野末乃秋乃草

あゝ枯れたる月のいでたり

月姫の見む大瀛の
砥げる鏡よさり立ちて
船の鹽瀬も曇りたれ
沖べこぐ舟揖とりて
いづこの浦よかへさなん

雨風潮煙、海は水は
波は男が、樓の宴
夕女と袖まきし
枕が上れ繪屏風に
降り暮したる春の雨

自然の寵兒、夕まぐれ
寂寥き野べに浮みて
残光雲よ望みては
さすが短かき人の世の
運命の風を袖に知り
心尾花の乱るらむ

黒雲暗きみ空より
降りろゝぎたる白雨に
正義は落る瀧津瀬のごと
只奔流の力するどき両舌に
名もなき道を説くといふ

人士の袖を華やかなる

きぬの衣もぬぎ捨て、
緑葉しげる木乃下に
睡りて夏の花籠の
胡蝶の夢よ遊びたる
稚子の昔にかへるとも
大龍神の野は消ぬじ

野べの柳にたちたまふ
霞がくれの佐保姫の
歌も聞ぬすなりし世に
今更きにを愕きて

人の子風に騒ぐらむ
世はたゞ異象ある夕ぐれどき

三、潜光を認む

杣人が斧も木に入らぬ
幽けき森乃杉の葉や
茂る叢にたづね入り
すいしき星のかげ一つ
照らすも萬の深き
思ひ示すを見出たり

花に耀く夜半の月
光は残る山の井の

水底深く覗ひて
澄める情を知れよかし

枯れたる月に朽星の
奇しきは秋の紅葉の
夏ればしめに染まるとき
人乃心の火は燃ゑて
天心高くのぼる下に
匂ひもうすし日の光

春が残れる谷間の
苔路乃露の雫にも
有情の影はうつりつゝ

疎韻れちくる山乃端れ
しもと松原あらはれて
細葉のゆらぎ閑かなり

白き日かけは湖の
海人が白帆を照さねど
火山の底に石はとけ
硫黄ながるゝ淵ぞある
ほとりよ人の行きたらば
何のみ神の戯れか
うれ白骨の醜男

打ては金黃よ焦れつゝ

毆けば色に啼く人の
聲ころ満つれ世の塵に
大龍神やいかるども
すいしきまゆ乃輝やける
吾に自然のゑまひあり

さりなさりとして茂る葉乃
杉の下枝の安らけき
鳥乃時にやどかりて
祈の歌をことあげむ
来ずや眼にくもりあき
男女はかみもこ乃めり

星は無花果の落るごと
月は紫陽草の色變り
てる日は葡萄の實の如く
み空沙丹わらび
我世こゝに碎けて
花桃の實を結ばぬとも
心、廣き樂園の
つゆ滋き夏の野の草

風

み空よ刻む浮彫の
雲こゝろなく飛びはなれ
人よ想を傷ましむるも

ともなふ風のあればなり

自然の文の糸綾の
葉はこゝろなく翻へり
秋ころ胸を騒がするも
ともなふ風乃あればなり

されば澄みたる香の通ふ
緑乃森乃夜の月の
烟れる影も八重に立ちて
雲のかくせる時もあれ

されば天地火のもゆる

樹立ぬ原乃紅の

夏の光も空に立ちて
砂のかくすときもわれ

あゝ鶯の羽を閉ぢ

花を草葉の根よさるふ

春の夕の風はかくまで

幼なき胸よやどりつゝ

または魔の吹く笛かふと

暗き夜よきく木枯の

落ちて聲なきかけをかくまで

我は淋しくいだきたり

うれ西風よ、こち風よ

風の白雨、浪は狂ひ

大山すみも荒いでむ

風の姿がかりなき

遠く去りては近く吹く

朝夕乃の聲は

寂しからずや水鳥の

浮寝の夢の子よ

野の入

黎明草よ満ち

薔薇の花の朝
光、ひろどりたる
森の白き霧

清き空よふる
鈴の音きこゆ

阿論あした祈禱終へて
野よかへり來か

いなろは知らず

谷川の水のせゝらぎ

石翠なるほとり

深き木かげの下

宮の階さざみ下り
生れし人の子ひとり

朝を朝な都にいで、
詩歌を説く

風雅あき子らは
たいいでよ戸の前
金の冠きぬの衣
朝の光よまばゆく

黄に紫に紅
七色耀く見む

高く崇とき姿
醉ふ子いくたり

黄金の羽翅

白銀の履にぬきかへ

雲こほる山の頂
秀める天部くだり

琴を弾ずるかしこき神
琴に調の歌をさげや

草の葉——鈴の音

袖の風——薔薇の花

榮はえふある

野の七百万里

羊のぬし

蓮の花の白露に

ひらく音ころ東明の

光を呼ばふひいきなれ

まだ夏の夜は山鳩の

和毛の胸よ残れども

老ひし智人はさめにけれ

若き羊ひつじを引き連れて
野しやうやうに逍遙しやうやうよいで、來し
鳥の羽衣うよくがやかに
まどふは麻あさの白布しろぬいか
袖そでよ入れたる詩の卷
角つゝの小笛こふエをとりろへて

ふまへる履つらに露つゆはちり
小さき虫とぶ草くさのうら
蜘蛛くまのかけたる關せき多く
しばし立つや人の影
れはふ狭霧さぎりの樹きを罩おほめて

風も渡らぬ静けさに

今いま予われさしくる朝あさの日の
光ひかりのうちに聲こゑありて
人ひとをば起おこせ世よの子こらが
生命いのちのためよつむと云ふ
葡萄ぶどうは園にに香かほ紅あか花はなの
香かほある泉いづみも湧わきいで、

恵めぐみみある野のようまねれち
自おのづとすぎし翁おきなころ
さかがら神かみのみ使つか乃なり
雲くもをふみゆくごとくある

姿すがた崇たかとみ満みち潮しほの
浪間に龍はをとるかち

見よ金色こんじきのいろふかく
天馬てんばの雲くもよいなゝきて
青あおき下界げかいの草くさを戀こふ
園うゑんにはひとり天地てんちの
弦つづみを動かす力ちからある
九十九つとむの翁おきなたゝずめり

今日のいのりの言の葉に
袖をふるへば霧きりさねて
手をめぐらせば立たまよふ

鼠ねずみのいろの雲崩くもれ
聲こゑをあぐればみ神かみらが
射やる時の矢やも流ながれゆく

夏なつは更よけゆく一ひとときよ
木きの實み梢しやうにほからみて
湖うみ近ちかき森もりかげの
あけび紫色むらさきもつき
葡萄ぶどうは棚たなに味あじふかく
柘榴ざくろは甘あまくみのりたり

白露しらつゆかをる夏の野のの
駒こまよのりては天空てんくうの

星のかずにも入るかいま

春のひな鳥音よあきて

木の間をくゆる歌のごと

雲よびたまふ角のたて笛

野葡萄

土すきかへし石を去り

肥ゑたる畑は苗植ゑて

好き實を結ぶ秋の日の

やがて来らん嬉しさよ

朝は謠ふ葡萄園

夕は去年の葡萄酒

嬉しからずや

緑葉の

蔭に葡萄の

染まるとき

たのしからずや

紫の

葡萄の房の

かゝるとき

狐入るかこ柵かまへ

畑よ望樓をしつらへて

好き實を結ぶ秋の日の

やがて来らん嬉しさに

朝あしたはうたふ葡萄園

夕は去こ年のふだう酒

たゞ一とせの

收と獲との

園そのの葡萄よ

實れかし

柵の横木も

たわますば

一人命の

緒をも絶たぬむ

落ちし床とこにも石いしを入れ

破やれし衣きぬもぬき捨て

よき實を結ぶ秋の日乃

やがて来らんうれしさに

朝は謠ふ葡萄園

夕は去年の葡萄酒

早はやも實のりて

色づけれ

園そのの葡萄の

濃こ紫むらさき

收穫も見わた

利も見わた

園乃葡萄の

棚たわゝ

實りまちつゝ謠ひつゝ

酒を飲みつゝ遊びつゝ

收穫の秋をまつ程よ

風は來りて葉を落し

鳥は來りてついはめど

葡萄のよきはまだあらず

あゝ草刈らず虫とらず

あゝ棚結はず手を入れず

なるにまかして朝はたゞ

酒にうたひて夕はたゞ

歌にいねたる報酬とて

黒き野葡萄山葡萄

仙 姑

蟪蛄一名天蟪一名仙蛄穴土而居有短翅四足雄者善鳴而飛雌者腹大羽小不善飛翹吸風食土喜就燈火

ふと夕暮の逍遙よ

ものゝ寂しき聲を聞き

耳覆ひしは無心

げよいと細き、鳴く聲の
風よもたへぬ趣きは
歌女がうたにやあるらむ

あゝうれはまた美はしき
聲れ姿よ穴にして
天蛤の鳴く音と人は知らじ

來ても見よかし草花は
いづれ香はなき思なき
歌女と天蛤乃姿や

春にうなる、花鳥や

夏のあしたの朝顔の
天蛤の命予はかきけれ

神や授けし戯むれに
姿れかしく産れたる
歌女乃身ころ悲しけれ

戀の焰よさけふ音も
空しくほかの名よ消えて
ありとも知れぬ穴の天蛤

れなじ光に生くる身の
たかき賤しきけじめあれ



人のさだめも似たらずや

秀ひでし才も秋の野や

千種ちくさがうちにうづもれて

水に流れつゆくもあり

無才も峰の夏木立

飛鳥の時旅人の

やどりの蔭となるもあり

かげかずもあれせまき世に

深き差けちめ才なき地ちの

草まがくれのろの天帖よ

いっはりの名の音にひらく
歌女か幸よくらぶれば
汝が領士の安けからずや

野 火

牧場あたりか草やく
煙の影ひろこり
村、山しづかに融けて
黄昏いつか湧きぬ

雲に落ちたる夕日
名残なき無我が境

燃ゆる一つ乃火かけ
賤の燈火か星か

夕づゝまたゝくした
燈火烟にもる
紅深くなりぬ
山やけ野やけ今知る

彼處住む人なきか
この里宿りあるも
零ふれこし旅人
我よかす情なし

野火山火誰がしわざ
よし人乃家なくも
袖の露滋からず
草枕風なからむ

燃えて消えてもゆ
似たらずやわが思
故郷に君すてゝ
今も父たづぬる身

哀れ面影知らで
いづこに訪ぬべしや
かれ光かの火は

神の招きかいざや

ぬば玉の闇

野べ路なきも

いろがむ

天なる父乃

まねきて告む

れとづれ

野べの兒

雲の衣を引まどひ

女神がのれる白駒の

闇より空に入ると見て

目覺し兒ころ崇とけれ

搖籠の床をぬけいで、

駒の行ゑやたづぬらん

野に小峰とぶ白薔薇の

蔭に稚子は來りたる

残んの星か白露の

胸に満ちくる朝ばらけ

何どはなしに微笑める

目にうるはしき光あり

かゝれば草の虫すらも
足のはとりに啼めぐり
茂れる森の巢をいでゝ
雛の山鳩空よ飛ぶ

樹立ぬ原よ住むといふ
獅子も馴れくる人の子の
清き野唄の聲を聞き
驚かけり去る雲の前

青き香高き草を食む
村の牧場の小羊よ

しばし化ししたる狼れ
形も今はかくれたり

流るゝ自然の眞清水を
稚子の悪魔よ乞へばとて
火焰乃油唇の
花の蕾にろゝがむや

露にちる薔薇の花びらの
草より蝶にうまれつゝ
羽袖縫ひあふ野べの舞
兒はたはむるゝ夏の風

吹かれて軽く飄り
み空に入りし蝶のむれ
野には残りぬ白あや乃
衣のみ風よゆらぎつゝ

歌の歎き

草葉もれくる白き日の
細き光もたぬがたく
白露こぼる淺茅生乃
根よころふかくかくれたれ
根にころ深くかくれつゝ

姿は見せぬいかにして
われを傷なふ人れ子の
朝夕に來らるらむ

あした夕よ歎きても
歎きつきせぬ秋の夜の
哀れと見らむも乃もなく
涙に朽つる我身かな

涙に朽ちて土となる
薄き生の盲兒には
あゝ在と云ふ殖生れ
めぐみの露やかゝらざる

めぐみの露のかららずも
せめて無き名乃立さらば
胸のいたみもなからむに
天蛤の歌ころうらみなれ

天蛤の歌をやうらむべき
何を人乃子あやまりて
いご、拙なき虫乃身に
くるしむ名ころ負せたる

五逆乃罪や前の世に
重ねし佛のいましめか
七生五生こゝよまた
變らざる名の歌女われ

松島歌

前

巨水に浮ぶ
松島の
巖の日かげ乃
濃紫
松の翠緑も
朝日夜に
まだ被ぎたる
夜のきぬ

満ちくる朝あさの

潮しほの音ねよ

千島ちしま百島ひゃくしま

夢ゆめさめて

八重やえの海原うみはら

ほのぶくと

明あきゆく彩いろぞ

けがれなき

花はなとよほひし

あか星あかほしも

夢ゆめ路ぢに消きえて

月つきのみを

中空ちゆうくう淡あはく

かげ白しろく

高たかく小こさく

残のこるなる

紅蓮ぐんねん花はな咲さく

朝あさ日子ひこは

光ひかり漂たふふ

沖おきの波なみ

邊へりの波なみ雲うみの

遠とほきにも

崇たかき韻いんは

耀やけれ

浪の穂ほあかく

海燃ぬゑて

黄金とけ合ふ

眩曜まばゆさに

うつる島影

松の影

黒く中は

別れたり

玉藻の馨かざり

かぐはしく

松れ葉渡る

朝風の

しづけき巔たかねの

雲といで、

鶴やみ空に

翔かりこむ

あしたの聲乃

松の風かぜ

朝あ乃いろ乃

島しま乃松

島と松との

浮うびたる

松島の海
たふとけれ

後

み空むがぶす

あまの原

八重のくまちの

ありろ海

浪連なれる

こゝはまた

もゆる火なかの

夕島や

笹椽深き

夕雲の

かゆきかくゆく

かげ見れば

島の八百島

しまの松

空にうつると

仰ふがるゝ

風の音なひ

絶わはてゝ

波も音なき

夕まぐれ

星の光も

見ゆるめて

はや新月の

さし乃ばれ

浦の玉藻や

流れよる

百の島曲れ

岩が根に

碎けてうつる

松乃影

月白銀を

ちりばめり

松の緑の

薄烟

濤れ白きも

けぶりつゝ

渡るみ空乃

月かげに

島の海ころ

うつくしき

月よ啼きゆく

鳥の音は

あま飛ぶ鶴の

聲やらむ

濱の真砂路

あどとめて

遊ぶは山と

水の神

松のみどりや

百島の

たくみの神の

現はれて

夜ころ遊べ

山水の

祇のめぐみの

れほいかる哉

小管笠

山は朝立ち

夜の舟どまり

雨も降るなよ

日も照るな

旅のほころび

誰が手に縫はず

針に糸添へ

伴したい

月もれ傘を
ほれめしたるへ
君もめしませ
れ十七を

馬を牽きませ
朝草刈の
行きは旅人
歸りや虫

ゆきはうつゝよ
棹さす渡し

もどりや流に
水鏡

太陽の詩

花、この靈光によりて咲き。葉、この靈光によりて茂り。人、この靈光によりて生く。絶大無限の自然美。何の思想、何の詞句を用ゐて之を謠はむ。されば吾太陽の詩は是を試みんとするものあり。

金鞍白馬

あした岷崙の谷をいで
夕べ芙蓉の峯にたつ
かけ万丈の白雲に
天使の金の晃冠の
ひかりを雨になげかけし
虹のうき橋ふみわたり
かたちむなしき碧空の
極みに吾はいたらんか
照る日の中を飛ぶ鷺の
廣き羽翼よ身をひろめ
百重の雲をちびけつゝ
星の世たかくかけりこむ

北斗はとほし霜の夜の
破軍のつるぎ見ぬざれば
さまよふ雲に鳥は入り
魂もむかしくちりよけり

棕櫚の葉にさす三日月の
光に獅子の吼るごと
みうら吹きこす風乃音よ
れどろきささむる手枕や
いつか駕りけむ白駒の
たてがみかゝやく金の鞍
衣は藤の濃紫

桂の鞭を手にとりて
手づなかいくる雲の上
天馬の草を戀したふ
青き下界の影は消ぬ
シヨープの神の放つよか
空に白光たかく立つ
光をさして翔り行く
駒のつばさ乃早ければ
蹄もたぬ万里のみち
秀白の百合の花の香の
夏ふかき野にはやつきて
むかしトロイは戦に

小手をかざして武士の
楯とも見ゆる金剛の
石門山に高くのびむかな

太陽乃神殿めぐる十二宮
光りかゝやく殿るよは
薔薇よやさる蜂のごと
しげくすこもる武士ら
雄々しき神も守りたまふ

七丈の劔ぬきもちて
しも夜越ゆる磨竭宮
寶瓶殿の春の夜に

うたげ開きしわがために
バツカス神の童子らが
ばらの番石榴もろとろ手にささげ
いあんひがし乃道を示す
いで朝風に打のりて
到らん天の八十蔭
太陽の宮
嘶く駒の行きまどへる
雲は遠くもかくれたり

黄道十二宮

一、地球——流星——月

柳にかけし佐保姫の
春の霞の衣白く
金糸みだるゝ日のゆふべ
花の冠かたむけて
冷人歌舞する宮ころは
たかります地の神の
雲むらさきの庭なれや

丹頂の鶴松に鳴く
御苑の夕べ立ちのぼる
白き雲は天津女が
不死の薬をやくやらむ

天の瓊^{じゆ}矛^ぼのかゝやきは
海よりいでし秋の月
佩^ひべる劔^{けん}乃^のかゝやきは
月よりねちし秋の水
みむねにひく曲^{まが}玉^{たま}は
振^ふ鈴^{すず}乃^の音^ねか金環^{きんわん}の
かぶとの星^{ほし}のかげさぬて
紫帳^{むらさきぢやう}よぬます身^みのかため
たとへば龍虎^{りゆうこ}威^いをふるひ
獅子^{しゆし}大象^{だいじやう}のいきほひや
帝釋^{ていじやく}修羅^{しゆら}乃^の日月^{にちげつ}も
手^てよころとらむ大^{だい}み神^{かみ}

玉^{たま}のみあらか渡^{わた}らせて
黄道^{わうだう}光^{ひかり}のほのかなる
み空^{みそら}の雲^{くも}よ放^{はな}ちけむ
白^{しろ}矢^やの征^{せい}矢^やは春^{はる}ふかき
星^{ほし}乃^のつぼねれ棟^{むね}を射^やり
紅^{べに}蓮^{れん}くづるゝ八^{はち}重^{じゆう}垣^{げん}や
霧^{きり}をうかちて降^ふり下^{くだ}る
雨^{あめ}は火^ひの雨^{あめ}星^{ほし}の雨^{あめ}
流^{なが}れ星^{ほし}と人^{ひと}は云^いふ
圓^ま生^{せい}樹^{じゆ}香^かのかをるなる
あやのとばりの奥^{おく}ふかく
はべるは月^{つき}乃^の姫^{ひめ}女^め皇^{みこと}

二絃はすみて松に落つ
尾上の夕べ秋の風
四絃はかなし籠の中よ
ひなをこひ鳴く夜のつる
黄金の笛のたかき音は
秦嶺の雲を動かさむ
うれ金谷の鶯の
梅に囀る聲きけば
天女が歌ににたるかな

こは帳臺の夕まぐれ
神と姫とが酒もりの

花のむしろにかしづきて
童女の歌よ合せたる
よろこびの曲千代の曲

たまきの光花かざし
黄金の釧くしろ白百合や
月の姫神かざりたる
十二の色いろのうるはしく
汐のけぶりのほの白き
大わだつみれ濤に照り
あるは嶺のへ松れ上
あるは鬼すむ谷の水

夜すがら空にゆきかひて
はらわめ謠ふざれ歌乃
をかしき節をきけよかし

行きてとらへよ

秋の夜の

月に湧きくる

八は汐の

浪間よ跳る

小兎を

一ひき二ひき

三ひき四ひき

長いれ耳を

打ちふりて

餅搗歌を

謠ふ予へ

たなゝし小舟

棹させば

夢か現か

白い烟よ

影が手まねぐ

よふ聲が

友づなとりて

小うさが

月の千すぢの

白いとに

つなぎ止むと

見ゆるめり

袖よ玉ちる

浪は七尺

浪七は七尺

底は藍

藍の匂ひの

高うござる

高い浮名の

つらからば

沖に出さんせ

夕まぐれ

濱に手をとる

はなれ君

同じくはうれ

月かけに

あつき腕を

まかんより

袂ひたすが

ましぢいの

出で、遊べよ

夜乃うみ

鼓なみ打ち

小兎をどる

跳るのが

とんと面白い

可愛^{かはゆ}い男

いとしい乙女

月のね宮へ

きたからは

三千歳の

桃をやる

※ ※ ※ ※

神のみ庭に春たけて

青葉いろます深みどり

下葉がくれにうるはしく

むすぶ果は兒の幼きよ

つむをふまかし玉ひたる

ろこに春あり乙女子の

戀する花は咲にほふ

ろこに秋あり虫の音に

九十九の翁世をなげく

ろこに人の子ふまへ行く

道ありしげる森のかげ

たてば衣よ吹きかよふ
神風胸にしみ入りて
思ひもいとゞ高からむ

柳にかけし佐保姫は
春の霞の衣白く
金糸みだるゝみ光の
つゝめる園はしづかなり

✽ ✽ ✽ ✽

葡萄の酒を造らんと
火帝の使神羽をのべて
行くは花ちる春の山
もゝ木匂はすみどり葉や

い乃ち與ふる草の種
双女の宮は棕櫚の葉よ
花咲く夏となりけり

二、火 皇

椰子の葉かげに金毛の
獅子のむれゐる夏の宮
火星乃あら神つれゝの
まひるの夢にさめしより
風ふきかよふ欄干に
禍のうた誦したまふ

君ます宮は十二城

衛士守る扉鐵の門

棕櫚の葉かげに金毛の

獅子乃むれぬる夏の國

禍のうた誦したまひ

幸多くして安き世よ

異象あらはすあら神の

ちからのほごなれろしき

流るゝ水もとゞまらん

夢路の草もれどろかむ

うれの小琴や市人の

うたも調も賑へば

空くれなるの咸陽の

花の都の春をねたみ

火龍をよびて風たてゝ

人の子泣くをあざはらひ

盃とりし日もありき

狂焰はやもしづまりて

殘塔しろく霜みちぬ

月は傾くモスコーに

いろめきかゝる鷲の旗

將士なげくをあざ笑ひ

姫とかたりし夜もありき

見よりのあつき唇は
ほのははくかど紅るに
息吹いわらの氣も高く
血汐ながるゝ赤き顔ばせ
戴く冠に猛火もゆる

三、木 夏

さふらんの花さき匂ひ
鳥は囀づる柳かげ
薔薇の花にはみつ蜂の
こもりて蜜をしたゝらす
青き果のなる無花果樹の
林に來鳴く班鳩の

袖にかいやく燈火に
聲はすいしき朝の風
崖の葡萄のいろづきて
つばめは谷に低くとぶ
夜をや猿のむすびけむ
幹にまつはる葛かづら
すゝきふみわけ小を篠の
木の果をあさる森の中
かるき裳裾をひるがへし
くゝのちの姫あうぶある
幹は苔むす木蓮の
つろの水に花落ちて

曉ふかく生れしか
清くも崇かきみすがたは
野の白百合の露を帯びて
日のみ光にたつごとく
谷なる洞乃奥より吹き起る
黒き風よは花の堪ぬざらむ

夕三日月のかけほろき
岡の林よ設らへし
白木の宮の欄干の
しづかなる夜をうた歌ふ
森よしらぶる

冬の琴

野にひきあせる
糸をたち
手にもつかをり
放たんに
白くも光れ
春の空

白くもひかる
春乃日の
姿かゝやく
ふり乃袖
摘みては入れし

草花の
夢からなくに
結ぶ實や

鳩とぶ森の
若みどり

若き葉かげの
木々の果の
ひだはみな落つ

夕まぐれ
夏乃風をや
あふぎなむ

夏の夕べの

みづらみ
湖の

汀のあしの
みだるゝよ

秋の初風

たちろめて
果ころこがね黄金に
いろづけれ

みのりし木々の

くだものゝ

一つくを

あつめては

籠かごもれるを

旅人よ

いろがて探れ

葉のしげみ

茂みの中の

一つだに

乙女残すな

胸あつく

戀の焰の

もゆるとき

ろゝがば露よ

しづむべし

あゝかぐはしき

木々の實の

高きかほりは

朝なさな

霞とたちて

静かある

宮の七重も

めぐるらむ

四、土 星

錦糸の縫ひの美はしき
にしきの帯を三重にまく



みけしや襟のみかざりの
ふれて玉鳴るすゝ風に
さらりとかゝる黒髪の
千すぢは肩に亂れたり
ろゝろ歩みよさしかざす
手馴れの風の扇にも
つゝみかねたる姿かな
こは埴安の姫にして
芙蓉の花の溶にけむ
白き泉乃流れより
生れいでたる乙女子乃

たい朧たけきよろほひに
誰れか知るべき亂れあふ
戦の場は敵乃前
旗とりあぐる武士の
雄々しき心あらんとは
野は鳥山の虎はむれ
猛きを草になびかせて
世は八束ねの白弓の
引くにやさしき麻の弦
白羽の征矢を打つがへ
鏑の光流さむに
恐れてひろむものあれば

夕ぐれ森の風たちて
露ちるしたに立ちし時
高くもつるを拂ひなば
魔ころ雲より降るらむ

扇もつ手のしなやかに
柳の腰はほろけれど
紅をふくめる唇乃
み聲は雲に力あり

見よ傍らに待べれると
白衣黒衣の人あらず
胸と金毛のたる、牛

毛は白かねのしろき象なり

五、天王皇

廣きみ空を司どる
大王こゝよますといふ
宮も五百重のあやにしき
あかき瑪瑙の闕みどのよそ
七つの雲をぬりなして
碑しや礫の行桁瑠璃のやね
欄には眞珠ちりばめり

あつき朱房乃ひもかゝる
南の窓の玉手箱

箱に中なる白雲や
黄雲あか雲うす雲の
朝なくする大王が
みのりにあるは紅葉ちる
巴狭の谷の橋となり
夕べは野べの春風に
花はひかりをつゝむかな
高嶺をわたる風よくづれて
ひるがへり散るむら雲の
かげもかけるふ夕づく日
秋は流るゝ河水に
うつるは宮か太陽の

寒水うろぐ谷の戸に
蟬の羽衣ぬぎすてむ
八月なかばあつき日の
紅る燃る雲間には
火帝の錦旗ひるがへり
玉の車駕かよふなる
春と冬と乃色たがひ
夏と秋とのいろたがふ
くしきは神のたくみなる哉

六、海王皇

干珠満珠の鎧よは

玉藻の糸をねどしたり
佩ける劔のがざりには
海のたからをちりばめり
玉鳴る花のにぎたへの
袖には描く袞龍や
こんどの冠頂ける
海王星のみことは
こゝよたちて
能力をふるふ地の上
宮は寶瓶神の藏

先づ大空にかゝりたる
無弦の弓を手にとりて

引けば海原立騒ぎ
いさををふらす疾き風に
黒雲をつく浪をあげ
水底ふかくひろみたる
大龍神はあれいでゝ
狂へどひるの常の日は
花鳥の像彫にたる
獨木の舟の鮫打つが
夕月乃ぼる沖つ浪
かへるしるしの火の山も
忘れて遠く篝たぐ

七、群星

霜は葉乃なき林に茂げく
雪は木のなき山に深し
ふかき雪降る
しげき霜をのがれて
浪あをき海原よ
廣く翼ろればひ
日もあたゝかなる
沖の小人島を
れろふと空を翔る鶴の
千羽乃羽たゝきさくかごと
軍士の喚聲前よ聞きぬ
白き光は條すぢをなして

空をななめに廣くきらめき
みぞりの光も條すぢをなして
うらを直にふ高くきらめく
右よ左よ近く長く
青きひかりは白き光輝ひかりよ
しろき光輝は青きひかりよ
まじりてきらめき
きらめきわたる
軍士の鎧や楯を望みぬ
春の若葉のやわらかきに
花の百いろ色をはこる
野べによりくる蜂すがるごとく

千軍万馬城にこもれり

あをく光る盃とよろひ
白くひかる楯と弓矢
うれより放つ不斷光は
晴れし神の日に
燦爛たり

勇力さづかるネルズの神
まへに敵なし軍士戦士

白百合花さく夏乃草に
白き羊のむれきて遊ぶ

野より岡より山を越えて

森の深さに駒をやれば

青葉乃風の袖に涼し

木かげの泉に水をかいて

駒を早ます

白羊宮のひがし

湧きづるも雲

落つるも雲乃

五百重よかゝる河の水

白くひろざる浪の狭霧

さぎりに別つ袖をまよふ

空の彦星ひきけん牛の

ふとき鼻綱の染分乃布

いろを見せたる
日乃み光

幾とせか經し雲の上に

ろ紫の衣はあせて

白銀の髪かたよ亂る

あゝはてもなき空を翔り

天の十二をめぐる人れ

吾は命の永久をもてり

鷲鷹のもつ翼を添へし

天馬は不死の春の若駒

見ずや光ある髯長く

ましましろき胸は春の山波

雪のあしたに望むごとく

眼のかゝやきはゆふべの星の

大洋の浪に洗はれいで

秋空たかく照るかごとよ

風切るひろき二つの翼

大浪巖によせし如く

空をつき雲をつかむ力あり

蹄も厚く肩肥わたる

肉つき乃豊かなるは

處女が頬にたぐへてむか

八、金 皇

光りましろき百すぢの征矢
ひかりくれあむ百條の獵矢
うすもの袖をなゝめ長く
蜘蛛の細糸風に飛ぶと
速く流れて雲に落ち行く

こは日の大がみ乃たくみ
風切る駒のひろき翼に
吹きなびくながき髯よ
繁くしげくたゝぬひまふなき
たづなひかへて足がきを止め

しばしたゝすむ森よ望めば
ゆらぐ梢の上に高く
太陽の宮は眉毛に見ゆるまれ

沈みて風の木の葉からぬ
夕なぎの空
川より森に森より谷と
ひける木魂

こは黄金わく山の洞の
巖うがちて工匠あまた
劔鑄るてふつちの音ぞ

げにや大王玉鳴る腰に
金わくところの鍵を帯ばす
鐵冠金笏白銀の履
万里の城は紫金まばゆし

九、水尾

上は白浪月にくだけ
下は青波しづか夜ねむる
華冠ちりばむくれなる瑪瑙
さらに紫七色深く
藻の葉乃かざりながく垂れて
海の香放つ袖の風に
潮のけぶりず玉座めぐる

うろくづみ階のもとにつらなめ
朝なさなみ告をぞ聞く
かくて草に花に露をあたへ
露に香をこめ若き子られ
むねにろゝぎて春の心を

山路にかゝる

瀧のしら糸

袖ひちて結ぶ月影

響もよほよくむや林葉の秋

夜もすがら飲酒たんじゆする翁

ろの子よあつき

神のみめぐみ

芳はしき

黄菊しら菊のつゆ

むすべる花びら

花より落ちて

玉の雫のれのづからに

酒とわきぬる深山の谷の

巖の洞蔭年をへつ

雲にのる人

鶴を友とす

龍の待臣のよばるゝ聲に

いは根の水のゆるぎ出て

かゝやく金壁星を流れ

人の世に雨とありつゆとなり

雪やあられと降りて下る

ノアの方舟ほふか浮ばせつるは

この水源こゝなりとかや

されば沙漠の夏の夕くれ

駱駝たふれて旅行く

人乃ながき

うらみを月に残す

力をも神のもたせられたれば

山をくづさむ技わざもあらせり

十、十二宮

蒼穹か深淵か混沌か
 われ神のごと靈あるも
 しばしはまごふ天球の
 無象は別つ十二方
 神秘の梁もたげしや
 ゆるがぬ園をめぐる星の
 光の五彩かげのあや
 金糸みだる、春の日の
 陽炎野べをつ、みたる
 一つの國は香にほふ
 梅乃花笠かたにかけ

鳥は來てさく聲きよく
 夜渡る月の姫女皇
 愛のひかりよ人乃子
 小琴の糸をかきならす
 調べは高き地球なる
 翼を西の風にのべ
 夏の夕くれ沙漠行けば
 獅子の吼ゆるを月よ聞かん
 二つの國を冬の夜の
 風を深山の谷に呼び
 狂ふ焰を弄ぶ
 神のみくらの火星なれ

駒の手綱を手よひかへ
下りて泉にたづねよる
林の奥のすいしさは
袖にもあまる木々の實や
み乃れる枝の葉をくぐり
鳥は囀へづる若みどり
若き女神のくゝのちの
袂を風よひるがへし
小鹿と遊ぶ三つの國は
かをりの高さ木星よ

金絲銀糸のみだれ織り

色は七色虹をなす
錦の帯や玉の袖に
くびうなだれてなつみ來る
金牛群なす四つの國は
山うるはしく明脂なる
水巖が根よ逆立ちて
いかりやすらん山々の
峰のぬすまひ谷のかげ
あしたは霧に埴安の
見むかぐれする土の星
混沌たるは太古まゝの
嘸しき空をめぐりつゝ

風西隨時乃能力ちからをうけて
みろらをなもり巡邏するは
夕べ越ぬさし第五の國
雲關高き天王星

青海原や千尋の
深き秘密にしづめたる
寶瓶人にさぐらせず
沖を白浪高くなして
水を治むる海王星
畑よこほる、芥子の實か
無量のかずの星を縫ひて

南をかけり北よ遠く
行けば黄金こがねの國を過ぎ
長城の紫金まばゆく
光さして
海のこなたは金波をどる
國は第九子の子に
命の水の井を與へ
草葉林くさばやしれ木々きぎ乃葉よ
白きあしたの露與ふ
水星劫初の流れあふれて
宏大たとへむものもあく
壯嚴とかむ言葉なき
不動乃海か深淵乃

緑れみ空聖みやまかるよ
奇しき力は人をうつ
わが太陽れみ光は
十二方宮集まりし
こゝ圓寰のまなかなり

十續の琴

十一、太陽の宮の
ほとりにて

春は白羊宮 金牛宮
双女宮の花のあけぼ乃

夏は巨蟹宮 獅子宮
室女宮の緑葉のつゆ

秋は天秤宮 天蝸宮
磨蝸宮乃風きよき夜

冬は人馬宮 寶瓶宮
双魚宮の雪を履みて

金鞍白馬み空行かひ
雲れ美天乃美きはめぬ

ちささき地乃美の夕昏

欄干らんかんよ倚る人の子よ

さかんなる萬よろづの光

星の自然知らずや

地に見るごと乃山高く

水青く花くれなるなり

夏乃光をやぞす青葉

蒨あざきに鳥の聲うつくし

かすみ白き花の峯の雲

のばさに蝶の逐ふ

秋の湖あさ霧消ぬて

すいしき風に白帆流る

草衣くさぎ紫袖むらさきそでへだてそあれど

同じき慈眼あまのまなこの大日王

されど月桂つきかき定なるあり

無明むみやうの春の夢に入るあり

光芒こうまうたとへば錦衣にしんぎよめき

綉裳しゅうじやうのひるがへるごと

あゝ紅顔の子に示す
大織おほはたのたかみかしこし

ねほひなる窠穹すゐに一つ
けだかき國土くにうれよ地球

君のみこゝろ行なはるゝ
同どうじ夕ゆふづゝ赤あかき家いへよ

うのあたゝかき父母ちちうぢのかげ
幸さいを祈いのる燈火とうしの前まへ

歌うたのさびしき庶人せじん
舞ま翔あどかける鳥とりと

致景ちしやうをつくす錦にしんの繪卷えまき
運うぶ歩あみの船ふねよ文ふみよめ

有情うじやうの乙女おんな戀こひになげき
詩人しじんの夕ゆふ哀あは浦うらせすや

神人かみじんまじり三春さんしゆん狩かりし
樵歌しやうか牧笛ぼくふえ草くさ安やすらなり

魔まや隠かく笠かさ隠かく簀すいののち後ご

窺ふはたゞ罪の子が額

ひかし澗攬樹の下かけ
聖者が告げし天の國

今十緒の琴をいだき
翼もつ子と歌ふ高き世のうた

かなでよ

黄金の琴

さがねの琴

かなでよ

かきあらせ

高きねいろ

たかき音色

かきならせ

うたへよ

讚美の歌

さんびのうた

うたへよ

聲をあげよ

一きは高く

ひときはたかく
こゑを上げよ

いましも

星の諸王みまらら

うるはしく若き光
あらはし玉はむ

群むれをひきゆる

小羊の

歸りゆくなる

鈴の音の

静かよひゆく

野の夕べ

夕もやかゝる

森の上よ

いましも

星乃みこら

わかき光

あらはしたまはむ

白楊葉やなぎふるふ

ろよ風よ

ろよげる岸の

さいれちみ

めぐりて岡を

流れゆく

河べみどり乃

麥の穂に

今しも

星の諸王みこらら

美はしく若きひかり

現はし玉へり

乙女はたどり

男の子行く

野べの野薔薇の

花白く

虫の黒きが

飛びめぐる

夕べの空の

しづかなるよ

今しも

ほしのみこら

若き光

あらはし玉へり

かきならせ

黄金の琴

こがねのこと
かきならせ

疾く飛ぶ十の小指
糸をはらへ
とくはしる十の小指
調みだせ

いでろの節は息をいれよ
たかく吹けよ
けだかくすめる七つの節
しらべあげよ

風よくるへ
白銀の笛
しろがねの笛
風にくるへ

いましも
星のみひかり
紅うすく
かいやきうめぬ

野べをつゝめる
夜がすみ
白露れりむ

夏の日の
鳩の木にさく
西の山
鐘は静かに
鳴るあたり

いましも
ほしのみ光
紫うすく
かゝやさうめぬ

黒きみけしの
神ねりて

引き渡したる
山や野の
とばりは深し
夜のうらの
闇に描きし
花たまき

今しも
星のみ光
くれなる深く
てりかゝやけり

海鳥岩の

床に入り

松原くろく

夜はれちて

磯の波のみ

たゞ白く

沖か低き乃

浪よ湧き

いましも

ほしのみひかり

紫ふかく

てりかゝやけり

うたへよ

しづかに

讚美の歌

うたへよ

ふけよ

音細く

銀の笛

ふけよ

調へよ

ひくゝ

黄金の琴

しらべよ

星のみこらは

光れさめ

神秘の帳とほり

かゝげたまはむ

雲の衣ころもを

肩にかけ

天使東に

とびたまふ

やみゆ朝の

聲湧きて

海の潮の

しらみろめ

輝やき渡る

み光の

星はさやけき

紅の

薔薇なす光

オーロラの

袂にかげを

かくしたり

無に入りて

誰かあけぼの

空の光の

宮ゐよ

東光の姫

先立て

車駕めぐらす

日のみ神

十二宮殿

かきやかし

雲を七色

虹はみめ

山を紫

いろざりて

やがてみ空に

東より西

野入 一ノ巻終

頁數 一〇八 一〇六 九三 八八 八三 八七 七五 五九 五五 五二 四九 三三 三一 二八 一五 一〇

正

行數 九 六 三 一 九 二 一 二 五 九 八 七 五 四 三 一 九 七 三 一 〇

誤

線を入れると (詩のしきりなり)
 全じく
 全じく
 全じく
 一字下れる場所あり之を揃へると
 線を入れると (詩のしきり)
 一字上れる場所あり之を下げるべし
 線を入れると
 全じく
 かざしてはし。の誤りなり
 〇の如きものはよして只一つの〇を真中れ少し上よ入
 るべし
 右と全じ
 全部取消
 つろとあるはうつろなり
 こんとあるはさんとの誤なり
 翼うは翼をの誤り

一〇九	一三	蜂の下へがれ一字を入れる
一一〇	九	子ルツは子ルヴの誤り
全上	一一	〇〇の如き者は削除〇一つ真中の少し上へ入るべし
一一三	一	髯とあるは鬢の誤り
一一三	一	まし餘計なり取るべし
一一四	二	髯とあるは鬢の誤り
一一五	五	沈みては沈める葉の下へも入るべし
一一一	八	涌は誦の誤
一三二	一二	さがねはこごねの誤
一四五	一三	入りては入る空の誤
一四六	二	空の光のは春花秋月なり
全上	七	日落ちたり
一四七	二	み空は弓なしなり

野低稚

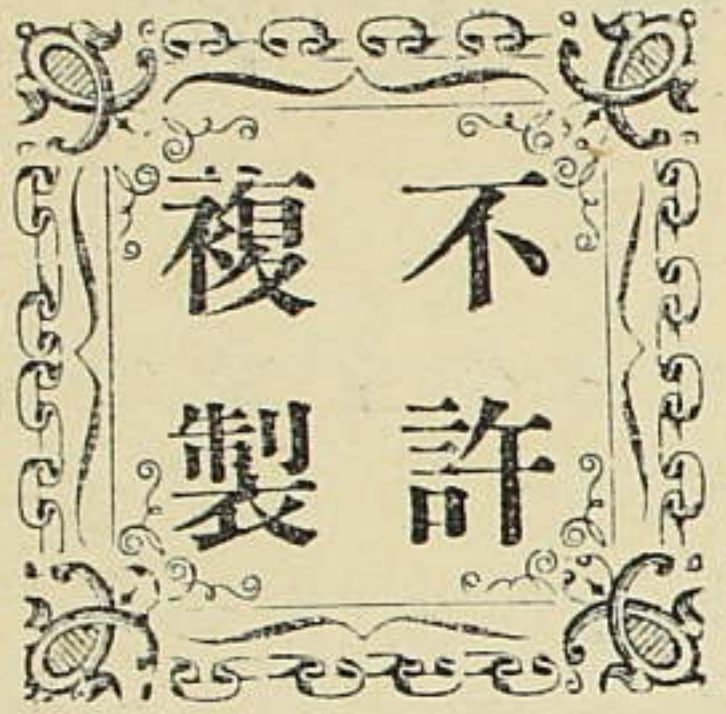
目次追加

人……(牛の圖)
唱……(僧の畫)
兒……(釣の圖)

以上平福百穂子筆

一〇〇〇

明治三十四年十一月十四日印刷
明治三十四年十一月十八日發行



著者 東京府豊多摩郡澁谷村 清水孝教
 發行者 仙臺市大町四丁目十四番地 木村文助
 全 仙臺市新傳馬町六番地 山本音四郎
 全 仙臺市名掛町五番地 佐藤養治
 全 仙臺市新傳馬町六番地 東北圖書出版舍
 印刷者 仙臺市東一番丁八十二番地 菅野清伸
 印刷所 仙臺市東壹番町八十二番地 菅野活版所

特別大賣所

東京市神田區表神保町	東	京	堂
全 裏神保町	上	田	屋
全 京橋區南德馬町二丁目	目	黒	甚
全 日本橋區通三丁目	林	平	七
全 通一丁目	大	倉	郎
全 橋町一丁目	大	書	店
全 神田區雉子町	岡	草	章
全 美土代町	岡	崎	店
大坂市南區安堂寺四丁目	富	田	店
全 東區備後町四丁目	田	文	堂
全 安土町四丁目	吉	中	門
全 南本町心齋橋通	積	岡	助
全 北久太郎町四丁目	金	善	店
全 心齋橋通順慶町北入東側	岡	尼	堂
	矢	本	助
	島	文	堂
	試	淵	堂
	進	本	堂
	堂	助	堂

草野 柴 二 著

言文致文集

洋裝 全一冊
定價金四拾錢
郵税金六錢
紙數四百餘頁

今後の日本文体は言文一致であるといふとは最早動かすべからざる議論で其わけも長らく讀賣新聞も見へ其他も諸大家の意見があつた。だから議論はこの位ひにして今からは其言文一致の實行に取かゝるのだ。其先鋒としては山田美妙子の次は堺枯川子の各出版されて文例を示した。しかも彼等は文例として出たので稍簡單に失する嫌ひがあるやうに思ふ。こゝろ二家より次いで敢へて其欠を補ふといふほどの大望ではないが一は言文一致實行を一日も早くしたため。一は稍や繁雜な事を書いて見やうと思つて著者は此本を出すとした。種類は手紙の文、日記乃文、記事論説の文及び(羅馬文手紙の文)と雜文などを集めた

仙臺市新傳馬町六番地

發行所

東北圖書出版會

初版賣切再出版來

土井晚曉鐘

菊判 全一冊
 やま綴 麗裝本
 定價 金四拾錢
 郵税 金四錢

是晚翠子が「天地有情」以後の作を編したるもの、今王陽明乃句よ困りて題して「曉鐘」と曰ふ君の詩は世己よ定評あり新詩國の建設未だ全からざる今日此書斯道に多少の貢献たるべきを信す幸に江湖の清覽を乞ふ

發行元

仙臺市名掛丁五番地
 仙市新傳馬町六番地

佐藤書店
 有千閣書店

農藝化學士 今井秀之助先生著

增訂新編 稻作改良論 全三版

洋裝 菊判全一冊
 正價 金參拾錢
 郵税 金四錢

本書ハ實地家ヲ以テ稱セラル、今井先生ガ農事巡回教師トシテ實地ニ臨ミ其當業者ニ講授セル稻作改良ノ方法ヲ最モ平易ノ文章ヲ以テ編綴修補シタルモノニシテ通俗農書トシテ而カモ其處政ノ老實的確ナル恐ラク本書ノ右ニ出ツルモノナシ本著ノ如キハ眞ニ斯業改良ニ志アルモノ、座右欠クベカラザル良書ナリ請フ當業者諸君陸續御購讀アラントナ

發賣元

仙臺市新傳馬町六番地

東北圖書出版舍

仙臺市役所御藏版縮寫

仙臺市測量全圖

明治三十四年十一月出版

勳七等三輪秀春先生著

改正宮城縣管内明細全圖

明治三十四年十一月出版

右二圖ハ實地測量至極明細ノ良地圖也

發行所 仙臺市新傳馬町 有千閣書店

全 定價 金五錢
郵税 金貳錢

全 定價 金拾五錢
郵税 金貳錢

東北特別大演習記事

正價 金十一錢
郵税 金二錢
(百ページ以上)

本書は第二、第八師團各隊の小機動演習より順序大演習記事を細大無洩記載せし者なれば一目にして明瞭たる良書なり

發行所 仙臺市新傳馬町 有千閣書店

東北行幸唱歌 正價 金貳錢
郵税 金十四枚迄

松嶋圖誌 正價 金拾貳錢
郵税 金

東北大演習記事 正價 金拾貳錢
郵税 金

智育鐵道唱歌 正價 金四錢
郵税 金貳錢

洗筆 正價 金拾貳錢
郵税 金

繪具皿斗り 正價 金六錢
郵税 金

增補仙臺案内 正價 金六錢
郵税 金

生徒用時間表 正價 金八錢
郵税 金

小學校用書見臺 正價 金壹個
郵税 金

入江祝衛著

日本俗語文考論

全一册 近刊

著者は多年、我俗語を數多の外國人に教授せるものにして其論する所、隨ひて斬新なり

本書は我俗語を行ひるゝ文法を批評し若くは之れを説明すると同時に其美點を發揮し所謂缺點を辯護し加ふるに英獨佛等の言語と比較して論述せり

故に我俗語の眞價を知り若くは歐州語に對する其地位如何を知らんとするものは勿論、苟も言文の一致を論じ又は身を教育に委ぬるものは必ず一讀す可き書なり

發行所
發賣元

仙臺市新傳馬町
仙臺市掛馬町
名掛馬町
仙臺市

東北圖書出版會
佐藤書店
有千閣

美文 青雨 作 小説

ほろ草

天の一方に無名の星が
あつた。夜なはなして、
小い眼をあいて、其の
づかに下界の山や川や
人々姿や戀の情や、ひ
どり眺めて樂んでゐる
と、下界には湖のほと
りよ、昔の友のゆかり
れ「星草」寂しげに空
を仰いでゐる。不便さ
に、青い光の波のまに
く、聲なき言葉の舟
を浮べて、うつと物語
つた其のくさくさ

近刊

近刊

目録

ゆめ路の
あけぼの記
朝籠の
燈籠がし
墓上の吹雪
湖上の吹雪
かたみがたり
天女の像
つれづれの
蝴蝶の恨
こころの

發行所 仙臺市五番地 尚文館

仙臺地方裁判所長 能勢 萬君題字
宮城縣仙臺市長 里見良顯君序文

菊田定郷君編纂

現行 公用文例類纂

全壹冊 壹部定價六拾錢
○郵税 一部金拾錢
○紙數 八百數十頁

本書ハ衆庶必要ノ公用文例ヲ戶籍、兵事、恩給、學事、圖書新聞紙、社寺、衛生、
訟訴非訟、登記、特許登録、土地、林野、鑛業、營業、警察、雜件等ノ十七類ニ分
纂シ併セテ現行ノ法令規則ヲ摘録シテ其願届手續及ビ參照條項ヲ明示シタルモノナ
レハ官ト民トニ論ナク座右寸時モ缺クベカラダレノ寶典タリ

發

行

所

仙臺市新傳
馬町六番地

有 千 閣

電話略 (ヤマ) (三百〇六番)

仙臺市
名掛町

尙 文 館

獨逸大家 ゲーテ 原著
日 本草野柴 一 譯述

ドロッテヤ

洋裝 全一冊
渡邊寧也氏畫
定價金廿五錢
郵税金 四錢

西獨逸の一邑に或る豪農があつた。父は素朴敬虔で、稍々東洋的の専制家、母は「仁愛の乳汁」に充ちた、情深く操正しい婦人。その昔の大火事が縁で今の良人と一つは成つて出来たのが本篇の男主人公ヘルマンである。時しも彼の佛國大革命に當つてその難をさけて、この地方にきた中に、ドロテヤといふ妙齡乃處女があつた。温順貞淑、俠勇、正義の徳を備へて、容姿は素より世の青年を魅するは足るほどのもので、青春多血のヘルマンは全くその擒となつてしまつた。ついに此兩主人は幾多の障碍を経て目出度伉儷を契るといふのが本篇の荒筋だ。以上の人物乃ほか、眞面目な牧師あり、滑稽な藥種屋あり、この二人がヘルマンとドロテヤ乃媒酌として活動してゐるから、面白いと受合と誰やらが保證してくれ。

發行所

仙臺市新傳
馬町六番地

東北圖書出版舍

- 一 御注文の際は必ず代價郵税共前金よて御送付有之度候 但し實際不便の地にて爲替取組相成り難く候はゞ郵券代用一割増にても宜敷御座候
- 一 小包郵便取扱所所在地よりの御注文に限り相互爲替取組の煩を相省き候爲め代金御送付無之候も代金引換小包として御送付可申上候間荷着否や小包引換に代金其局へ御拂込被下候ても宜敷御座候
- 一 弊店は本紙記載書目の外内外各種の書籍澤山取揃へ置き候らへども萬一品切等の節は至急版元より取寄格外廉價に調進可仕候間何卒御注文仰付られ度候
- 一 弊店へ御送金に節郵便爲替なれば(仙臺市名掛町郵便取組所)に於て受取り得らる様御取組被成下度又た郵便切手にて御送附の際は切手と切手の附着せざる様其間へ白紙御挿入被下度候
- 一 弊店へ御照會の際は必ず往復はがき若くは返信料御封入被下度候
- 一 弊店の發賣書籍は時々廣告す故に書籍目錄御入用の方は御申越次第送呈す

仙臺市新傳馬町六番地

發行所

有千閣書店

電話(ヤマ) (三百〇六番)

